

みんなのNPO研究室を振り返る

静岡県立大学 教員：津富 宏

「みんなのNPO研究室」という試みは、静岡県立大学在学中に、学生サークルでの活動に取り組み、そして、卒業後、社会を少しでもよくしようという活動をしてきた卒業生たちに語り合ってもらい、今の自分たちのありようについて洞察を得てもらったり、また、その語り合いを現役学生に共有してもらうことで、現役学生に参加している学生サークルでの活動の意味を感じてもらったりしようという試みである。

「みんなのNPO研究室」という名前を付けたが、NPOは、公 public と私 private の中間領域にある。私の理解では、この領域は、中間であるがゆえに、そもそも矛盾を抱えている。目的と手段を、なんらかの妥協のもとにハイブリッドにしないといけないうことだ。中間領域を、空白領域にしないという目標は良い。しかしながら、その領域を自発的結社 voluntary association で埋めようとするれば、矛盾と向き合わざるを得ない。卒業生たちが、その矛盾とどう向き合っているのか、また、学生サークルに取り組んだことがその向き合い方をどのように支えているかを知りたいと思った。学生サークルという原体験が、卒業生の今にどう活かしているかである。私には二つの発見があった。

第一の発見は、この原体験は、学生サークルで活動した卒業生は、ミッションをめぐる二つの問いを持ち続けながら生きようになるということである。一つは、「これは本当に私たちのやりたいことか」という問い、もう一つは、「私たちは本当にミッションを達成しているのか」という問いである。学生サークルの活動とは、この二つの問いをめぐる、ぐるぐるし続ける活動であるといつてよい。卒業生たちは、このような問い方を保ち、そして、それに対する答えを深化させている。

一つ目の問いは、自分自身が持っている価値に関する問いであり、自分(たち)の目指していることに本当に意味があるのか、有意義なのかという問いである。NPOが中間領域にある限り、目指している目標と、目指すための手段との間の矛盾には、学生サークル以上に向き合わざるを得ない。この問いに対する答えが深化するとは、問いに答えるための補助線を手に入れるということである。たとえば、社会構造という補助線を引けば、今、晒されている矛盾が、個人的なものではなく、社会的に「強制」されている矛盾だと気づき、矛盾の解き方が変わってくる。人権という補助線を引けば、価値という部分で合意がとりやすくなる。より良い補助

線を引けるというのは賢くなるということだと思う。つまり、この問いは、卒業生を賢くしている。

二つ目の問いは、自分自身の出来ばえに対する問いであり、今の自分の力量や暮らしの中で、納得できるまでやれているのかという問いである。当然のことだが、誰もが、今できることには限りがある。しかしながら、もう少しできるのではないかと、もっとできるのではないかと、再度自問自答する。いったん、利益追求を目指す民間企業で働いたけれども、現在は、NPOをはじめとする社会的な目的をもつ場で働いている人も少なくない。それは、やはり、自分ができることをやっているのかという問いを持ち、できる範囲を広げようとしたからだと思う。この問いを持てば、自分には厳しくならざるを得ず、悩まざるを得ない。つまり、この問いは、卒業生の試行錯誤を支えている。

第二の発見は、卒業生たちは、学生サークルでの活動を通じて身体化した、人とのつながり方を保ちながら生き続け、その結果として人生を変えていくということである。学生サークルは、上記のような問いについてよりよく答えようと、仲間とともに試行錯誤する濃密な交流の場である。指示を出す―指示を受けるという関係でない集団で、議論をし、共に学び、実践をする。そこでは、通常の間人関係では味わえない、より深いところで、人と人が対等につながる経験がなされている。卒業生たちは、こうした実体験に基づく「人とのつながり方」を感覚的に「正しい」ものとして手放さず、一種のスタイルとして身体化している。異なる生き方や働き方をしようとも、卒業生は、このスタイルを發揮しながら、人生を切り開いている。

NPOという、中間領域を生き抜く卒業生たちは、中間領域にいるがゆえに出会わざるを得ない二つの問いを手放さず試行錯誤し、また、中間領域でなければ身につけることができない人とのつながり方を手放さず身近な民主主義を実践している。

この冊子が、この中間領域を生き抜こうとしているがゆえに悩まざるを得ない方々と、中間領域に一步踏み込もうとしている若き後輩に勇気を与えることを願っている。

つとけん発 みんなのNPO研究室



発行 つとけん発 みんなのNPO研究室

編集 留奥志保・渡辺眞子・村松可菜・津富 宏

構成・デザイン 磯村拓也(デザインオフィス iromono lab)

連絡先 ▶ tsutomi@u-shizuoka-ken.ac.jp



みんなのNPO研究室
ホームページはこちら

本冊子は、令和4年度 教員特別研究「研究テーマ 市民活動・NPO・対人支援分野の隘路と希望：卒業生との共同プロジェクト」の成果をまとめたものです

NPOに関わる人・関わりたいと考える人のための 学びを深めるプラットフォーム「みんなのNPO研究室」

「みんなのNPO研究室」は、NPOに関わる人たちが日々の取り組みの中で向き合う普遍的なテーマについて語り合い、お互いの考えが可視化されることで、学びを深めていく場です。全6回のトークセッションを通じて、さまざまな視点からNPOについての学びを深めます。

各トークセッションのスピーカーを務めるのは、静岡県立大学を卒業し、NPO等の社会的な活動に関わる卒業生たちです。静岡県立大学には、社会貢献を目的とした学生団体が多く存在します。例えば、国際協力・環境・まちづくり・多文化共生・子どもの学習支援・若者の社会参画など、さまざまなテーマに基づいて、学生の自発的な活動により運営されています。

こうした学生時代の活動がきっかけとなり、その後のキャリア選択において、NPOに携わることを選

択した卒業生が複数存在していることから、今回の企画が生まれました。大学の一角にある研究室のように、自由に探求できる空間で、これからのNPOの在り方についてヒントを探ります。

本冊子では、「みんなのNPO研究室」で実施したトークセッションの内容をお伝えします。



※なお、本企画における「NPO」とは、一般的なNPO法人そのものを示すものではなく、社会的・公益的な取組・事業を行う組織全般を示すものです。非営利組織を中心に、社会貢献につながる事業を行う企業等の事例も扱います。

トークセッションについて

トークセッションのテーマは、NPOでのキャリアについて考える「NPOの働き方」、組織運営の悩みについて考える「NPOの悩み方」、個別具体的なテーマを探求する「NPOの考え方」の3分野から構成されます。

各テーマに紐づいたゲストを招き、テーマに沿った「問い」を立てながら、探求を深めます。日々の仕事や活動の中で感じるリアルな想いや考えを語り合うことで、新たな学びや発見がありました。

NPOの 働き方編

- 第1回 よりよい社会をつくる仕事・活動に携わるわたしのキャリア
- 第2回 NPOで働く・活動するみんなのお悩み座談会（※非公開）

NPOの 悩み方編

- 第3回 わたしのミッションと暮らしのすり合わせ
- 第4回 NPOの財源に関する勉強会

NPOの 考え方編

- 第5回 人を援助することを考える
- 第6回 学生時代の活動がいまの自分にもたらしたものは

「みんなのNPO研究室」を企画するわたしたちについて

「みんなのNPO研究室」は、静岡県立大学の卒業生3名と教授により企画・運営されているプロジェクトです。

静岡県立大学は学生数3000名弱という規模の大学ですが、社会貢献を目的とした学生団体が多く存在します。例えば、国際協力・環境・まちづくり・多文化共生・子どもの学習支援・若者の社会参画・対話の場づくり・大学生のキャリア支援など、さまざまなテーマに基づいて、学生の自発的な活動により運営されています。

それらの学生団体の顧問を務めている津富宏教授の研究室は、学生の間で「つとけん」と呼ばれ、十数年前から現在に至るまで、学生団体に所属する

学生たちが毎日のように集う場となっています。研究室に出入りする学生たちは、所属・学部を超えて自由に交流し、時には熱く議論を交わすこともありました。

こうした学生時代の経験がきっかけとなり、その後のキャリア選択において、NPOに携わることを選択した卒業生が少しずつ増えてきました。わたしたち、「みんなのNPO研究室」企画メンバーもその1人です。

静岡県立大学の一角にある「つとけん」のように、「みんなのNPO研究室」のプロジェクトを通じて、NPOに関わる人たちが自由に探求できる空間が作られたらと考えています。

企画・運営メンバー



津富 宏

国際関係学部国際関係学科教授、国際関係学研究所教授（兼務）

私の研究室に出入りしていた学生さんの中から、多くの方が「NPO」のお仕事に携わっています。私の（早期）退職を控えて、こうした卒業生の皆さんに、私の研究室で行われていたような、活発かつ率直な意見交換をしていただき、私たちの未来を展望したいと思っています。皆さん、楽しみにしてください。



留奥 志保

NPO法人LEGIKA（静岡県立大学国際関係学部2013年卒業/1990年生まれ）

とても幸せなことに、卒業後も（NPO界隈に限らず）尊敬できる方にはたくさん出会えたと思っています。…が。NPOにまつわるとストレートな悩みを、飾ることなくぶつけ合えるのって、やっぱり一般棟6F一番奥の研究室で過ごしたみなさんなんです。「じゃ、あとで研究室で話そ。」この言葉を久しぶりにみなさんに言えることが嬉しいです。



渡辺 眞子

NPO職員（静岡県立大学国際関係学部2015年卒業/1992年生まれ）

ある日、津富先生からお電話をいただき「NPOに関わる卒業生たちが今どんなことを考えているのか、知りたいんだ」と相談を受けたことがきっかけとなって生まれたこのプロジェクト。恩師の退官を前に、「つとけん」で過ごした日々が今の自分の原点だ」と感じているOBOGと一緒に、NPOの現在地点と未来について考える機会となればと思っています。



村松 可菜

一般社団法人グリーンパークあさはた（静岡県立大学食品栄養科学部2019年卒業/1996年生まれ）

学生時代のサークル活動でいろんな人に出会い、視野が広がりました。サークル活動が充実していたのは、つとけんがあったからこそ。つとけんのような、ふらっと立ち寄れば誰かいて、何かすっきりしたり、ほっとしたりできる…そんな場をつくってあげたいなと思っています。



NPOの働き方編 みんなのNPO 研究室レポート #01

よりよい社会をつくる仕事・活動に携わるわたしのキャリア

2022/05/29(sun) 16:00 - 17:30 / online / free



guest

株式会社マザーハウス
小島 優さん
静岡県立大学国際関係学部
(2007年卒業)



guest

NPO法人TEDIC 代表理事
鈴木 平さん
静岡県立大学国際関係学部
(2011年卒業)



guest

静岡2.0 発起人
大原 みちのさん
静岡県立大学国際関係学部
(2014年卒業)



facilitator

一般社団法人 グリーンパークあさはた
村松 可菜さん
静岡県立大学食品栄養科学部
(2019年卒業)


TALK SESSION

今回のゲストは、「途上国から世界に通用するブランドをつくる」を理念に、途上国の素材と職人の手仕事から生まれたバッグ、ジュエリー、アパレルなどを手掛ける株式会社マザーハウスで働く小島 優さん。宮城県石巻市で、「すべての子ども・若者が自分の人生を自分で生きる」ことができる地域社会を目指して活動する、NPO法人TEDIC 代表理事の鈴木平さん。東日本大震災をきっかけに、「被災する前に、できることをしておきたい」という想いのもと、静岡2.0という市民団体を立ち上げた大原 みちのさん。企業・NPO・市民活動というそれぞれ異なるフィールドで、よりよい社会にむけて事業や活動に取り組む3人のキャリアについてお話を伺いました。

ビジネスを通じて途上国の可能性に光を当てたい -小島優さんのキャリアの歩み


まずは、小島さんの現在に至るまでのキャリアの歩みについて伺いました。

幼い頃から海外への憧れがあり、中学生時代に緒方貞子さんに影響を受けたことで、国際社会への関心をいただくようになった小島さん。大学入学後は、学生のキャリア支援に取り組む学生団体等での活動に取り組み、大学卒業後、食品商社へと就職をしますが「20代のうちに海外で働く経験をしたい!」と、イギリスへワーキングホリデーに行く決断をします。

 小島さん：ワーホリ=遊びと思われのがいやで、思いっきり働いた2年間でした。職を決めずに現地に行って、日本食レストランでアルバイトしながら現地のエージェントに登録し、最終的にはイギリス系の旅行会社で働くことになりました。英語力がある方だと思っていたけど全然ダメで、苦労したこともあったけど、現地の働き方を経験できたのがよかったです。自分にとってはとても楽しい2年間でした。

ワーキングホリデーから帰国後、イギリスに行く前から採用選考への応募を検討していたマザーハウスに応募をします

が、その時の選考では採用には至りませんでした。それでも、マザーハウスで働くことを諦めずにチャレンジを続けた背景には、学生の頃に経験した原体験がありました。

 小島さん：一度落ちてしまった時にマザーハウスで働くことを諦めていたけど、産休中に自分のキャリアの棚卸しをする中で、**学生時代にバングラデシュのグラミン銀行にインターンへ行った経験を思い出したんです。**そこで、「**ビジネスを通じて光が当たらないところに光を当てたい**」という思いが蘇ってきました。元々やりたかったことと現地在がかけ離れていることを感じていた時に、今担当している「E. (イードット)」の広告をSNSで見て、新しい事業が立ち上がったタイミングでもう一度、ダメもとで挑戦してみたんです。

もう一度挑戦できたのは、自分の原体験に立ち返った時に「**ビジネスを通じて可能性を広げたい**」と思ったから。”**途上国**”と呼ばれてしまう、多くの方がマイナスのイメージをもつ国に対して、**プロダクトを通じて素晴らしい資源・技術がある**という可能性を伝えられるし、**プロダクトを通じてお客様自身が新しい自分に気づける**という可能性が、この仕事にはあると感じています。


働くことを通じて「生きていく・人と関わるうえでの"問い"」をもらえた

-鈴木平さんのキャリアの歩み

続いて、鈴木さんの現在に至るまでのキャリアの歩みについて伺いました。

大学在学中は、複数の学生団体に所属しながら、現在も静岡県立大学で活動する「環境サークルCO-CO」を立ち上げるなど、精力的に活動をしていた鈴木さん。

その中で、鈴木さんが働くこととなる「公益社団法人チャンス・フォー・チルドレン(以下、CFC)」の理事と出会うなど、その後のキャリアにつながる出会いが多く得られた学生時代を過ごされたそうです。ただ、大学卒業後にいきなりNPOに就職したわけではなく、IT系ベンチャー企業への就職を決断しました。


 鈴木さん：当時考えていたことが稚拙で恥ずかしいと思うけど、振り返ってみると「**まず力をつけないとNPOでやっていけないのでは、特にビジネス面の力が必要だ**」と思ってITベンチャーに就職しました。**NPOはいいことやっているんだけど財力や仕事の力量の面で足りない部分があるという感覚をもっていたので、そういう面の力がないとやれないんじゃないか**と感じていました。

ITベンチャーで2年ほど働いたのちに、CFCへと転職をします。CFCで約4年働いたタイミングで、鈴木さんにある転職が訪れました。


地域と関わることをライフワークにしたい -大原みちのさんのキャリアの歩み

続いて、大原さんの現在に至るまでのキャリアについて伺いました。


大学在学中に休学をして、愛媛県愛南町でアルバイトとして働いていたという、珍しい経歴を持つ青野さん。この愛南町での経験が今の働き方にも繋がっているそうです。

 大原さん：愛南町という小さな町に精神病院が一つあって、そのスタッフと患者、地域の方がNPOを運営しているんですが、障害がある人も高齢者も「共に生きる、共に働く」というのがコンセプトでした。お世話になっている大学の先生を通じてその存在を知ることができたのですが、当時の自分の中では「**農業と地域**」が一つテーマになっていて、ちょうど愛南町のNPOで農業にも取り組んでいたことや、自分自身の家族に精神障害を持つ人がいるなかで、自分の中の気になるテーマが全部あるとおもって愛南町に行きました。そのNPOでは、**理事長をはじめとした皆さんが、他に自分の仕事を持ちつつNPOを運営しているという姿勢がいい**など感じました。

休学後に「静岡2.0」を立ち上げた大原さんですが、休学中、愛南町で働いた後に石巻を訪れた経験が団体発足に大きく

 鈴木さん：2018年頃に今後の働き方について見つめ直す出来事があり、働く場所について選択をしなければならぬ状況になりました。東北に残るか・離れるか決めなければならない局面に立った時に、東北という地域や出会った人たちにとても強く魅力を感じていたことに気づいたんです。そして、東北に残る選択肢を選びました。同じ時期に、TEDICから「一緒に働かないか」と声をかけてもらって、TEDICへの転職を決めました。TEDICを選んだのは、後から振り返って考えると**いい選択だった**と思っています。当時は気づいていなかったけど、**自分は人を能力でみたり、結果が全てという価値観で育ってきていました。TEDICで、いろんな状況の中で生きている子どもたちやスタッフ・ボランティアと関わるなかで、自分の価値観や、生きること・人と関わることについての問いをたくさんもらえた。**それがすごく苦しい時期もあったけど、今はすごく**いい選択だった**と思っています。NPO業界の中にも能力主義がすごく埋め込まれているとおもっていて、「生活困窮者をこの数だけ支援すればいくら財源がもらえる」という仕組みもある。**社会の中に蔓延っている能力主義の価値観がケアの現場にも影響を及ぼしていることは想像していなかったんです。**TEDICに入る前の自分は「**純粋にいいことをしている**」としか感じていませんでした。

影響しています。

 大原さん：愛南町にいた時にたまたま石巻で活動している方と知り合いになって、愛南町で働く期間が終わったタイミングで石巻に滞在させてもらいました。**自分の地元である焼津と石巻がすごく似ていると感じて、自分の地元が被災したらこうなっちゃうと感じたんです。**福祉避難所という、仮設住宅に1人で住んでいたけど生活がままならなくなってしまった方や、DVの問題など、さまざまな問題が生じている方が避難して暮らす場所に伺って、お話を聞かせていただくことができました。**福祉避難所にいらっしゃる方々の「人とのつながりの弱さ」を感じた一方で、他に目を向けるといろんな人たちと繋がりをもって前を向いている方もいて、普段の人との繋がりが震災後の困難に大きく影響していることを感じたんです。**防波堤をどうするかそういうことはできないけど、**人とのつながりを事前に作っておく**ということは学生の自分でもできるかもしれないと思いました。

そして、愛南町に行っても、石巻に行っても、自分の地元のことを考えている自分がいて、静岡に帰ったら自分の地元で何かをしたいと考えていました。自分の両親が、読み聞かせのボランティアや地域の役割を担っているのが普通だったので、地域と関わることをライフワークとしたいとおもって、静岡2.0を立ち上げる時も、学生団体ではなく地域団体にしようと言って社会人の方も仲間にして、卒業後も活動を続けるつもりでスタートしました。

企業・NPO・市民活動、それぞれの「良さ」と「葛藤」

後半のトークセッションでは、「今の携わり方だからできること・できないこと」について3人にお話を伺いました。

小島さん：自分は「0→1」で新しく物事を生み出したタイプではありますが、**会社の戦略と紐づけた中で自分のやりたいことを整理し、お客様にどれだけ価値のあることなのかを考え、会社の利益や成果につながる提案やアウトプットをしていく必要があります。**単純な「やりたい」という想いではできないというのが、大原さんたちのような市民活動との違いとしてあるかもしれません。

鈴木さん：一般的には「NPOってボランティアでしょ？」って言われることが多いです。そして、理解してもらい難しさもある。あと、**去年から代表をやっていますが、自分の思いだけではなく、周りの思いも汲んで"代わりに表す"役割を担う歯痒さもあつたりします。**「自分がやりた

現在、子育てをしながら活動に関わる大原さんですが、ライフステージの変化の中で、団体活動を続けていけるか悩んだ時期がありました。「自分が活動から離れたら静岡2.0は終わってしまうのでは」と考えていた時に、大学の後輩でもある静岡2.0のメンバーが代表を引き継いでくれたことで、現在も子育てをしながらライフワークとして活動に関わり続けることができています。

いことができる」という訳ではなく、いまの組織で出来ないことは他の場所でやっていく必要があることも考えています。

大原さん：自分達の無理のないペースを大切にしながら、他のメンバーの生活にも配慮し合いながらできているのは良い点だと思っています。仕事として市民活動センターにも関わっていますが、行政の仕事になるので、枠組みや自分が持つ権限のなかでできることが限られてしまうと感じます。**仕事でやっているみなさんに比べたら注ぎ込める時間が少ないという葛藤があり、歯痒いです。**「いま自分たちが大切にしていることを取捨選択する必要がありますよね」ということもメンバーと話しています。

取り組みの先にある「よりよい社会」とは

トークセッションの最後に、ゲストの3人が考える「よりよい社会とはどんなものか」についてお話いただきました。

小島さん：一回失敗をしたり、成功のレールから外れても何度でも戻って挑戦できる社会、違いを尊重して認め合える社会だと感じています。マザーハウスの役割として「途上国の可能性に光を当てる」というものがありますが、「可能性に光を当てる」という意味で、いつでも誰でもチャレンジできるようになるといいなと感じています。周り支え合いながら可能性を發揮できるといいなと。自分自身、20代の時期に悩んで葛藤して、36歳でマザーハウスに転職しました。一回り年齢が下の方が上司という環境の中で、自分自身の可能性も証明したいと思っています。

鈴木さん：この問い自体を問い続けることがよりよい社会に繋がるのではと考えていました。前提として、自分にとっての社会をどう設定するかが大事だと思います。自分1人、自分と家族・・・何に置き換えるか。石巻を

社会とした時に、TEDICだけがよりよい社会を考えても仕方がないとも思います。子どもたちや住民の方と一緒に考えないと意味がない。一つの言葉に決めたほうがスマートだと思うけど、余白がある価値観や考え方があって、ずっとみんながそれを問い続けることで、それぞれに生きやすい社会の在り方が生まれることが大切だと思います。

大原さん：社会をどう捉えるかという場合に、自分自身もひとりのメンバーだと思っていて、まずは自分自身が元気であることも大事だと思っています。あとは、どんな状況でも納得していただけること。生きていくいろいろなことが起きると思うけど、どんな状況でも納得していただけることが大切だと思っています。誰もが納得しながら生きていくためには、納得できない現状を草の根から変えることができたり、選択肢を増やすことができたり、はたまた自分が変わらなくても大丈夫と思えるくらい柔軟で包摂的な社会や地域だといいいなと思います。

みなさんのお話を聞いて

三者三様のキャリアの歩み、そしてそれぞれの携わり方における良さや葛藤まで、たっぷりお聞きすることができたトークセッションでした。「社会をよくしたい」という想いを持った時、どんな働き方・生き方ができるのかを具体的に知ることができた機会になりました。



NPOの悩み方編 みんなのNPO 研究室レポート #02

わたしのミッションと暮らしのすり合わせ

2022/10/01 (sat) 18:30 - 20:30 / online / free

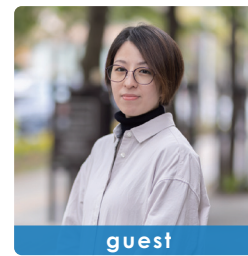


guest

NPO法人青少年就労支援ネットワーク静岡

若林 勇太さん

静岡県立大学国際関係学部
(2013年卒業)



guest

NPO法人LEGIKA

留奥 志保さん

静岡県立大学国際関係学部
(2013年卒業)



guest

社会福祉法人静和会

柴田 涼さん

静岡県立大学国際関係学部
(2014年卒業)



facilitator

一般社団法人グリーンパークあさはた

村松 可菜さん

静岡県立大学食品栄養科学部
(2019年卒業)

TALK SESSION

今回のテーマは「わたしのミッションと暮らしのすり合わせ」。みんなのNPO 研究室のこれまでのトークセッションの中で、NPO 業界や人を支援するという業界で働く人の悩みの一つに「ワークライフバランス」があげられました。しかし、仕事と生活というようには、一概には分けられないと考え、ここではあえて仕事ではなくミッションという言葉を選びました。(※このレポートで用いる「ミッション」とは、自分の大切にしている価値観のことを指します。)

ゲストの現在の仕事と暮らし

まずはみなさんのご経歴と現在のお仕事・暮らしの様子を伺いました。

仕事

若林勇太さん

ニート・ひきこもりなど働くことに悩みを抱えている方への就労支援

留奥志保さん

学生寮の運営、漫画家の支援（共同生活の中のコミュニケーションサポート、成長支援）

柴田涼さん

おうち探しに困っている方（高齢者、シングルマザー、ホームレスの方など）のサポート

暮らし

サウナとウイスキー
ハムスターのお世話


1児(3歳)の母
晩酌、漫画愛読

サーフィン、ギター、市民活動（静岡2.0：コミュニティレジリエンスを高め困難を緩やかに乗り越えていくことを目指す団体）

ミッション「大切にしている価値観」

自己紹介を終え、最初のトークセッションのテーマは、「大切にしている価値観」。ゲストの皆さんが、現在どんなことを大切に、日々奮闘しているのかをお聞きました。


📌 イメージはハムスターのエサ。誰かの「貯め」になりたい。ー若林勇太さん

 若林さん：ちょっと抽象的な話になるんですけど、私になりたいなあって思ってるのはですね…。ちょうど二週間ぐらい前に、家でハムスターを飼い始めたんです。まだ二週間でぜんぜん懐いてないんですけど、かわいくて。何がかわいって、餌をね、貯蔵行動っていうんですけど、餌をほっぺに貯めるんですよ。たくさん。ほっぺに貯めて、すごいほっぺをふくらまして、自分の巣にこう持ってって。置いておくんですよ。別にそれ食べるわけじゃないみたいなんですけど、置いとけば置いておくほど、すごく安心するみたいで。食べ物がないってすごくストレスでなんか不安になっちゃうみたい。何が言いたかったって、僕の価値観とかミッションとかは、その貯めてあるエサになりたいって思ったりするんです。

社会活動家の湯浅誠さんが言っていられる「貯め」という言葉があります。何かがあったときに、支えてくれる人間関係だとか、何かがあったときに…、例えば、塾に行くお金がないとかね。そういう人が、頑張れるためにはやっぱり貯めが必要だな、なんて言ったりするんです。(これは)ハムスターにとってのエサですよ。僕はニート支援だとか引きこもり支援っていうのをやりますけれども、自分の関わる人だったり、自分が作る場が、まあそういった関わる人にとっても「貯め」になればいいなあって。こんなことを大事にしながら、仕事をしています。




📌 半径2メートルの範囲を良くしていく積み重ねー留奥志保さん

 留奥さん：私は、今の活動に至っている礎には、やっぱり学生時代の経験があると思います。今もあるサークルで言うと、YECという若者支援の分野で活動している団体と、津富先生のやっている就労支援の活動にかなり強い影響を受けました。もう一つ、多分現在はファシリテーション同好会という名前で静岡県立大にあると思いますが、POCっていう団体でファシリテーションの活動をしていました。簡単に言うと、その辺りの活動を全部ひっくるめたことを今やっている感じです。例えば、学生寮に関わるってところで言うと、共同生活ってすごい、むき出しの人間性が出るというか…我慢するとやっていけないし、折り合いを

つけなければいいってものでもないし…。そこでどう自分らしくあるかっていうこととか、一緒に生活するその半径2メートルの距離感をどう良くしていくかがすごく求められる場所なんです。私はその場所に魅力を感じています。私自身も自分らしさっていうものを、自分が関わる人には大切にしたいなあと思いますし、やっぱり半径2メートルの範囲を良くしていく積み重ねがたぶんこの社会を良くしていくんだろうなっていうところで、そこを自分は大切にしています。私のミッションというか…自分がそういう人たちのそばに居たいというのが私の動機かなと思います。うまく言語化できないですけど。

📌 周りの「困った」を社会構造レベルでよくしたいー柴田涼さん

 柴田さん：自分は、社会の中で「困った」という心というか、困った状態とか、そういう人たちの社会構造レベルで、よくしていくということをやりたいのだと最近気づきました。社会構造というのは、文化とかそういうものになると思います。若林さんと同じく、自分も湯浅さんに影響を受けています。スタート（生まれ落ちてから）の差が社会の中にある＝社会格差に納得いかないんです。県大で課題だと思っていることを言語化してもらいました。貧困問題についても正面から答えてくれ、納得する答えをくれたのが津富先生です。


困った人に会ったときに、何かしたいけど何もできなかったという経験や、自分が暮らしていてこんなことに困った、躓いた時に「どうしよう」って心の動きがあったからそういうふうになるんだと思います。そういう文化があれば転ばずに済んだはず。環境を整えたらいいのになって思っています。


自分のミッションと暮らし両立って難しい？

自分のやりたい(ミッション)が仕事と重なってきた皆さんですが、自分のミッションと暮らしの両立については、様々な面で難しさもあることがわかりました。

📌 ①お給料と働き方


みなさん人並みにもらっていると思うのですが、課題もあるようです。


 若林さん：僕は人並みな気がするけど、この先の給与の上り幅は何もわからないです。一年働いたら何千円、何万円上がるとかっていうのは、期待しない方がいいんだろうなあって思っています。NPOの事業は委託業務がメインで、単年度のものが多いので、そこに何とかしがみつくてリスクが高いです。リスクヘッジとして、自分の食いぶちは自分で作りたい。委託事業を新たにしてくるとかね。

 留奥さん：正直こっぴど働いたらもうちょっともらっていいだろうって思う日の方が多いです。家族を持つと、


📌 ②オンとオフの切り替え

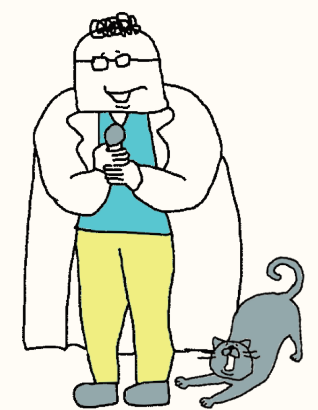
どんな職業でも、オンとオフは課題だと思いますが、3人ともそれぞれの考えをお持ちでした。

 留奥さん：子供産んでから無理やり切り分けるように頑張っています。やらないとか、別の手段を探したり、ほかの人にやってもらっていますが、やりたいことを百やれるかっていうと、なかなか…という感じです。

 若林さん：NPOで働いて、なんか熱い思いがないといけないんじゃないの?って思われてる気もしています。僕はそういう思いも持ちつつ、所詮仕事と思おうとしている自分がいます。そう思わないとそれこそ夜中の2時まで付き合ってしまう。他者への思い溢れる自分も出てきたりしてしまうので。所詮は8時間やる暇つぶし。でも同じ暇つぶしだったら、楽しい方がいいだろうし、やりがいがあった方がいい。

自分のやりたいだけではうまくいかないなって思うところが多いです。今は子供もいるっていうのも含め、給料とか働き方の話になると、ちょっとゴニョゴニョしてしまいます。人並みくらいで子供と楽しく過ごせたらいいなと思う中で、こっぴどあくせくやっても給料が見合っていないって言われるのは分かるけど、この活動に会ってしまったら、自分のやりたいに出会ってしまった以上、簡単には離れられないという気持ちもあります。現実をとるか、自分の気持ちをとるかというところで、ずっと悩み続けてます。

 柴田さん：自分は相談者さんのことを考える時間は圧倒的に増えました。一度、バランスが取れなくなって、うつじゃないけど、元気がなくなっちゃったことはありました。でも、そこも学ぶしかないと思います。どっかでやっぱり切り替えなきゃいけない、自分ができないラインがあるってことを知って、切り替えなきゃならない。この仕事で傷ついて学ぶしかないかな…って。



③会社のミッションと経営

地域の問題を解決していくことを（困っている人の助けになることを）仕事としている皆さんにとって、その仕事が必要なくなるのが嬉しいことだけれど、その反面自分の仕事が必要なくなるということは生活ができなくなるということ…そんなジレンマを抱えているということがわかりました。また、市民側から見て、地域の問題を住民が人任せにならないように、市民（活動団体）がもっとNPOと関わることが必要なのではないかという意見もありました。

留奥さん：今の判断って本当に純粋にミッションというか、支援者・対象者に対する判断だったのだから？経営的、いわゆる数字での判断だったんじゃないかと思うことをやることは実は増えていて、ストレスっていうとちょっと違うけれど、モヤモヤしています。

若林さん：ほくも、NPOで働くことの根本っていうんですかね？「地域から問題を奪わない」ことが大事だというふうには思っています。

留奥さん：簡単に言うと、（私たちの仕事は）自分の仕事なくなるためにやってるじゃないですか。それって不安ですよね。

若林さん：そうそう。だから、自分たちが食べていけば食べていこうとするほど、「地域から問題を奪い、ミッションから離れていく…」みたいな。そんなジレンマを感じながら…。

留奥さん：そうなんですよね。そこに対していい塩梅が見つからなくて悩み続けています。

柴田さん：自分は市民活動の角度からも入っています。ニートだったり、ひきこもりって言われてる人達が、どうやって地域に出て行くかは、（地域の）みんなで考えること、一緒にやっていくことだと思っています。市民活動的な角度から入ると、NPOが頑張れば頑張っていくほど組織がなくなる（＝支援する人がいなくなるのが良い社会）というのが自分はよくわからない。だから、市民活動を広げていくという角度から、NPOと協力したいという気持ちが強くあります。



みなさんのお話を聞いて

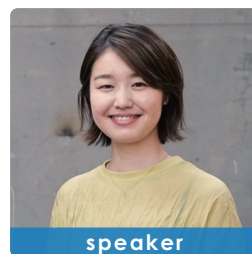
自分のミッションと暮らしの両立については、様々な面で難しさもあることがわかりました。ただし、若林さんがおっしゃっていましたが、これはNPOや社会福祉法人で働いているということに限ったことではないと思います。また、自分のミッション（大切にしている価値観）をお仕事にすることは、やりがいがあるということがわかりました。プライベートの時間を注ぐほど自分の想いを入れられるというのは、ある面から見れば危険な状態なのかもしれませんが、また一方から見ればとても素敵なことだと感じました。自分のミッションや暮らしとどう向き合っていくべきかを考える良い機会となりました。また、この会のゲストの皆さんは全員転職を経験されていて、かつ民間企業で働いたことがある方々でした。会の中では、ゲストの皆さんの転職理由や影響を受けた方のお話もお聞きしましたが、みなさん、民間企業を経験したからこそ自分のミッションがはっきりし、やりたいことと稼ぎを重ね合わせられるようになってきたこと、大学時代に出会った方やサークル活動に影響を受けたということも大きな発見だったように思います。



NPOの働き方編 みんなのNPO 研究室レポート #03

NPOの財源に関する勉強会

2022/11/08(tue) 19:30 - 21:00 / online / free / semiclosed



speaker

NPO職員
渡辺 眞子さん
静岡県立大学国際関係学部
(2015年卒業)



speaker

NPO法人TEDIC 代表理事
鈴木 平さん
静岡県立大学国際関係学部
(2011年卒業)

special guest

自動車部品メーカー広報
中畑 陽一さん
静岡県立大学国際関係学部
(2002年卒業)

助成財団職員
渡真利 紘一さん



TALK SESSION

これまで、みんなのNPO 研究室では「働く個人」に焦点を当てたトークセッションを実施してきました。今回はその発展系として「個人」から「組織」に焦点を移し、NPOの財源確保についてケーススタディを通じた勉強会を開催しました。

勉強会では、NPOで働くリーダーがこれまで携わった財源確保・事業運営の事例を持ち寄り、その事例の中で生まれた悩みや葛藤・課題感について話題提供を行いました。また、ゲストとして「助成財団スタッフ」「企業CSR担当者」を迎え、多角的な視点で議論を深めました。

※なお、本勉強会は招待制のセミクローズド方式で実施しました。そのため、このレポートでは、議論の要点を一部抜粋してお伝えいたします。

登壇者の紹介

今回の勉強会では、話題提供役として静岡県立大学卒業後にNPOで働く2名が登壇しました。

宮城県石巻市で子ども・若者を支援するNPO法人TEDICの代表理事を務める鈴木平さん。そして、みんなのNPO 研究室の事務局でもあり、就労支援に取り組むNPOで働く渡

辺眞子が当日の進行兼スピーカーを務めました。また、議論を深めるスペシャルゲストをお二人お招きしました。まずは、助成財団で働く渡真利 紘一さん。そして、企業でCSR・広報等を担当されてきたご経験を持つ、中畑 陽一さんにもご参加いただきました。

ケース①助成金を活用した事業における、より良い「継続」の形とは

まず最初に、3年間の助成プログラムを通じて実施された若者支援の取り組みについてケーススタディを行いました。事例の詳細については、情報保護の観点により省略しますが、議論のポイントとなった要点のみをご紹介します。

3年間の助成を通じた「ホテル事業」という位置づけで、NPO・助成財団・行政の3者で協働するスキームのもと実施された。

実施期間の途中で、当初、事業終了後の出口として想定していた財源確保（行政における予算化）が困難となり、新た

な財源を確保する必要性が生じた。

その過程で、事業スキーム転換に迫られ、対象者や事業目的(mission)についても見直す必要性が生じた。



助成プログラム・モデル事業の狙いの背景

まずはじめに、助成プログラムやモデル事業が持つ役割について、多様な視点をもとに整理するところから議論がスタートしました。

そもそも助成プログラムが持つ意味として、「事業・政策の実験的な位置づけ」「既存の価値観や常識の代替案（オルタナティブ）の提示」が挙げられました。こうした側面から、公共政策を含めた他の資金提供者に影響を与えていくことや、同じ分野で活動する他のNPOにナレッジを共有してい

くことが、助成プログラムが果たす役割として一般的に認識されているようです。

中でも、特に「モデル事業」においては、事業終了後に「制度化」や「他地域への横展開」が期待され、社会全体に普及していく役割を担っています。そのため、複雑な課題に対応する先駆的な取り組みであるケースが多く、事業の効果検証とセットで実施される点が特徴です。

した形から遠ざかってしまったりする。

- 先駆性と地域への浸透が相反する部分があり、エッジの効いた取り組みを実施することが求められる一方で、地域にはシンプルなものではないと浸透しないという矛盾があるのではないか。
- 事業の「成功」の判断軸は何か。個人的には、それは「最弱者」のためになったのかという軸だと考える。今回のケースで取り扱った「事業継続」は、「成功」だったのか。それを「成功」とすると、今回の判断軸は何なのだろうか。そして、その判断軸を用いるという根拠は何だろうか。そして、その判断軸を用いることの波及効果は何だろうか。

「先駆性」や「社会への普及」を期待することで生じる葛藤

モデル事業については、その性質から生じる課題や葛藤もあります。今回の勉強会ではその点についても、さまざまな意見が挙がりました。

- 先駆的な取り組みであるがゆえに失敗もあるはずだが、資金提供者側の期待が大きいプロジェクトであるため、「失敗」という整理がしづらい状況があるのではないかと。
- また、制度化や他地域への展開を見据えるがあまり、事業の良い面ばかりを見せようとし、課題が見えづらくなってしまっているのではないかと。
- 対外的な発信により社会にうねりを作り出そうとする一方で、事業の軌道修正がしづらくなったり、制度化や横展開を目指すことで地域や対象者1人ひとりのニーズを考慮

理念や対象者を大切にしながら事業の継続性を担保するには

上記のように、助成プログラム・モデル事業という性質から生じる課題や葛藤があることを踏まえた上で、NPOや助成財団等のステークホルダーは何をもって"この取り組みは成功した"と定義するのでしょうか。

本ケーススタディで扱った事例においては、「事業を継続させること」を優先するがあまり、本来この取り組みを届けたいと考えていた対象層や、当初の狙いとして掲げていた目的(mission)を変更する結果となりました。事業を実施する過程でどのようなことを意識すれば、取り組みが持つ理念や対象者を大切にしながら事業の継続性を担保することができたのかについても整理をしてみました。

そもそも「事業継続の手段」とは、どういったものが挙げられるのでしょうか。本勉強会では、以下の5つの手段が挙げられました。

- A 自団体が本人や企業から(又は別事業から)収入を得て継続
- B 自団体が賛同者からの寄付・会費(支援性)を得て継続
- C 他団体や関係機関との役割分担(事業分散)による継続(連携体制構築)
- D 制度化による継続(予算化又は現行の制度対象を広げる)
- E 多様な関係者の異なるニーズを満たす事業を構想し、会費(対価性)等を得て継続

本ケースで扱った事例については、Dの制度化による継続を目指していましたが、AやBなどの財源確保の方法だけでなく、Cのように他団体や関係機関と連携体制を構築することで事業分散するという手段や、Eのように多様な関係者の異なるニーズを満たす事業を構想するという手段など、事業目的に応じて複数を組み合わせる選択していく方法があったかもしれません。

さらに、その事業自体を継続させる視点だけではなく、横展開や制度化という結果の部分には表しきれない、事業による知見や経験が「開かれた社会資源」として地域や社会に引き継がれるという視点の重要性についても言及がなされました。

また、事業を実施するNPOが「何をもって成功とするのか」「何を大切にしたいのか」を組織内部で十分にコミュニケーションを図ることや、それを踏まえてステークホルダーと濃度の高いコミュニケーションを図ることの必要性についても触れました。

ケース②NPOと地域の企業が協働するためには

続いては、企業からの寄付を通じた取り組みについてケーススタディを行いました。議論のポイントは以下のとおりです。

- 企業の社会貢献活動の方向性や財源の捻出方法はどのようなものか。
- NPOとして地域づくりを見据えて地元企業との関係性を作りたいが、どのようにすれば良いかわからない。

企業が「社会的価値」を創造する必要性の高まり

まずはじめに、近年の企業が置かれている状況から議論がスタートしました。世界的な動きの中で、企業の価値創造の一環として、社会の持続可能な発展に寄与する事業を行うことで社会に価値をもたらす役割を企業が担う必要性が高まっているそうです。

企業は何のために存在するのかという「パーパス」への関心が高まり、その見直しに取り組む企業が増えており、その中で企業が社会とのつながりを改めて見つめ直したり、社会への意識が強化されている状況があるとのことでした。

そうした背景の中で、企業として社会で生じている問題や課題をどのように捉え、その問題の解決にむけてどういった取り組みが必要なのかを考える機会が増えており、そうした際にNPOが持つ視点やナレッジが必要になってくる実情があるようです。

そうした中で、例えば、行政を通じて企業とNPOがコミュニケーションを取る機会が作られ、両者で取り組みの方向性が揃えば、協働の機会をつくること出来るのではないかと意見が挙がりました。

企業とNPOの協働の実情について

企業が地域のNPOと協働した事例について、スポーツ団体のスポンサーになったり、若者の居場所支援を行うNPOに寄付を行うなどの取り組みが紹介されました。多くは資金や物品の支援に留まり、単発で終わってしまうケースばかりだそうで、現状の在り方について議論がなされました。

例えば、居場所支援への寄付をした際には、「若者が居場所に来る理由や原因」や「若者達がどうなったら望ましい状

況だと言えるのか」「地域全体がよくなる方法は何か」などについて、企業側としてもなかなか理解が進まず、継続的な取り組みに発展しづらい実情があるそうです。

また、課題が解決されて成果が見えやすいテーマについては資金が投入されやすい一方で、権利保障などのテーマについてはイメージがしづらいこともあり企業の取り組みが進んでいかないのではないかと意見も出ました。

みなさんのお話を聞いて

今回の勉強会全体を通じて、「どのように財源を確保するか」という問いよりも、「NPOの理念や事業の対象者を大事にする財源の在り方とは」という問いが重要なのだという気づきがありました。また、この問いをNPO・企業・助成財団・行政など、多様な立場の関係者が一緒に考えていくことで、より本質的な学びに繋がることを実感しました。





NPOの悩み方編 みんなのNPO 研究室レポート #04

「人を援助すること」を考える

2023/1/19(thu) 19:00 - 20:30 / online / free



guest

社会福祉法人一麦会
湯浅 雄偉さん
静岡県立大学国際関係学部
(2012年卒業)



guest

NPO法人青少年就労支援ネットワーク静岡
宮西 悠さん
静岡県立大学国際関係学部
(2020年卒業)



guest

社会福祉法人城ヶ崎いこいの郷
森 洋子さん
静岡県立大学国際関係学部
(2020年卒業)



facilitator

NPO職員
渡辺 真子さん
静岡県立大学国際関係学部
(2015年卒業)

TALK SESSION

みんなのNPO 研究室、第5弾のトークセッションを1月19日に実施しました!今回のテーマは「人を援助すること」について。人や社会と関わる仕事のひとつである「対人援助職」。今回は対人援助の仕事に就き、日々支援の現場で人と向き合っているゲストをお招きし、そのリアルを語り合いました。


登壇者の紹介

今回のトークセッションでは、静岡県立大学卒業後に対人援助職として働く3名が登壇しました。1人目は、和歌山の社会福祉法人一麦会が運営する「ソーシャルファームもぎたて」で働く、湯浅雄偉さん。2人目は、静岡の「NPO法人青少年就労支援ネットワーク静岡」で働く、宮西悠さん。そして、静岡の社会福祉法人城ヶ崎いこいの郷が運営する「障害者支援施設碧の園」で生活支援員として働く、森洋子さんにご参加いただきました。(モデレーターは、みんなのNPO 研究室事務局の渡辺真子が務めました!)

「他者を知る」「人と関わる」というキーワードがみつかった学生時代

今回ゲストとして登壇いただいた3人は、福祉を専門的に扱う学部ではない、国際関係学部で学生時代を過ごしていました。みなさん、当初から対人援助の仕事に就きたいと考えていた訳ではなかったようです。どんなきっかけで対人援助の仕事を決めたのか伺いました。

宮西さんは、半年ほど前に現在のお仕事に転職した経緯があります。大学卒業後は、自分が経験したことのない分野にあえてチャレンジしてみようと考え、設備メーカーの営業職として就職しました。その後、自分のやりたいことを見つめ直し、現在のお仕事に転職を決めました。「やりたいこと」を考える際に立ち返ったのは、学生時代の活動だったそうです。

 宮西さん：私のこれまでの整理してみると、自分自身のキーワードになったものが「他者を知る」「人と関わる」でした。私はもともと人と関わるのが苦手ではあったんですが、大学に入学してすぐに「静岡2.0」という地域団体に所属して、地域で対話型のワークショップやまちあるきイ

ベントを企画したりしました。その中で、どんどんと「人と関わることの楽しさ」を感じるようになりました。

そこから、さらに色々なボランティア活動に参加するなかで「もっと自分を出したい」と考えるようになった時に会ったのが「ゆうゆう舎」という、身体・知的障害を持つ方をサポートするNPOでした。初めて、障害を持つ方々と触れ合うことになったのですが、「ここ、すごく居心地がいい」と思えたんです。ごちゃごちゃした感じが好きで、何一つとして綺麗にまとまらないところが心地よくて「わたしもここに居ていいんだ」と思えたことがすごく良かったです。自分と違う人、「他者」と触れ合うことへの楽しさや喜びを感じられた経験でした。

大学卒業後に就いた営業の仕事を通じて、「やっぱり自分は人と向き合うことを仕事にしたい」と気づいた宮西さん。学生時代にいろんな活動に参加しながら、自分自身のキーワードを模索したことが、卒業後のキャリア選択にも大きく影響していることが伺えました。


宮西さんのこれまでの経歴

- 2014年
 - 静岡県立大学 国際関係学部国際言語文化学科:入学
 - 地域団体 静岡2.0:所属
 - 地域の交流の場“ひろば”(対話型ワークショップ、まちあるき)の企画・運営を行う。
 - 青少年就労支援ネットワーク静岡「就労支援セミナー」にボランティアとして参加
 - ボランティアサークル こんべいとう:所属
- 2016年
 - 特定非営利活動法人ゆうゆう舎:入社(アルバイト)
 - 身体・知的障がい者の介助スタッフを経験。移動支援従事者養成研修修了
 - 福井県の障がい者自立生活センターCom-SupportProjectにて短期インターン経験
- 2017年
 - 中国・上海にて語学留学
 - 帰国後、再びゆうゆう舎にて勤務。子ども写真館のアシスタントにもチャレンジした
- 2020年
 - 卒業後、工場向け付帯設備メーカー入社 法人営業に従事
- 2022年
 - NPO法人 青少年就労支援ネットワーク静岡:入職
 - 静岡地域若者サポートステーション 就労支援サポーターに

「人が好き」というまっすぐな想いが原動力になる

次に、ゲストのみなさんに、支援において大切にしていることや原動力となっていることを伺いました。日々の実際の支援の中で起きた出来事やストーリーから、自身のやりがいを感じた瞬間をお聞きしました。

対人援助の仕事と言ってもその幅はすごく多様で、宮西さんや湯浅さんのように「働く」という部分を支える仕事もあれば、森さんのお仕事のように「日常生活」を支えるという関わり方もあります。森さんは、障害を抱える方の暮らしを支える仕事に取り組む中で、小さな変化や成長を感じられた時にやりがいを感じるそうです。


 森さん：自分の頭をすごく叩いちゃう利用者さんが出て、理由を聞いても「わかんない」としか答えられない状況がありました。多分、本人も本当にわからないんだと思うんですけど、「自分の身体を大切にしてほしいか

ら、叩きたくなったら自分の頭を撫でてみようか」という話を繰り返していきうちに、それができるようになっていたり。そういう小さいこと、ちょっとした変化や時間をかけて変化していくことを感じられるときにやりがいを感じます。出来ることが一つ増えたという、成長がやっぱり嬉しいです。利用者の方々の笑顔を見て、こちらが元気をもらうということばかりです。

森さんのお仕事は、食事や入浴の介助をするなど日々の暮らしを支えるもの。たとえば、家族であったとしても大変さを感じるような支援だと思いますが、森さんは「抵抗だったり、嫌だなと思うことはまったくありません」と笑顔で話してくれました。森さんのお話から、純粋に「人が好き」という根底にある気持ちが、森さんの原動力になっていると感じました。

「ケア」を担う対人援助職だから直面する、社会の仕組みにおける限界や矛盾

最後に、日々の支援において「あるべき姿」と「現実」の狭間の葛藤について伺いました。支援をする相手との向き合い方における葛藤、組織として支援に取り組む上での葛藤など、さまざまな視点から意見が出ましたが、湯浅さんからは「対人支援職だからこそ社会システム上の矛盾や限界に直面しやすい」というお話がありました。

 湯浅さん：対人援助という仕事は「ケア」とも言い換えられます。みんな赤ちゃんの時から大人になるまで、だれかの「ほっとけない」に助けられて、支えあって、依存しあって生きてきていると思います。

ケアは社会保障の仕組みの中で成り立っている部分があります。ケアの仕事で「人が足りない」等の限界は、すなわち制度の矛盾や限界でもあるわけです。ケアの仕事をしている人だからこそ、仕事としてどういう制度・仕組みの中で成

り立っているのかという視点を持って、職場の同僚たちや労働・福祉の現場で働く人たちと一緒に考えて、社会に投げかける動きをつくりたいと思っているんですけど、仕事の中で運動に変えていくことや言葉で表していくことは、なかなか難しいと感じています。どうしてもケアって気持ちの問題とか、お世話の問題に回収されてしまうんですね。それが私は問題だと思っているんですけど、職場のなかの会話で作り出すことが難しいです。

対人援助職には、社会のなかでの支援やケアの在り方を考える役割があること、そして、対人援助職に関わる人たちだけで考えるのではなく、ケアに依存している社会側にも投げかけて行く必要があると感じるお話でした。

仕事にするのか、ボランティアとして関わるのか

ゲストからのトークを聞いたあとでは、参加者のみなさんからの質問に答えていく時間を設けました。その中で大学生の方から「対人援助にボランティアとして関わったことがあるが、仕事にするかどうか迷っている。ボランティアと仕事の違いは何か?」という質問が寄せられました。

A. 学生時代はフラットに自分の問題意識を語れる環境があったけど、職場では色んな考えを持つ人がいて、自分の考えが受け入れられない場面もある。組織としての支援の方向性と、目の前の利用者の方の意向が反する場合に葛藤を感じることもある。そこは学生時代にボランティアとして取り組んでいた時と仕事として取り組んでいる現在の違いかもしれない。

A. 仕事にするのであれば、どんな想いを持っている人が働いている職場なのか重要になると思う。自分が志や想いを持っても、さまざまな背景の方が働いているので、なかなか想いを共有できない環境だと孤立感を感じてしまうと思う。

「本当に目の前の人の“より良く生きる”に繋がっているのか」という問いの重要性

ゲストのお話では、日々の支援を通じてやりがいを感じる出来事もある一方で、「自分の関わりは本当に目の前の人により良く生きることに繋がったのだろうか」と自問する場面も多かったです。

例えば、就労支援においては、一般的には「働くこと」を目指して支援を行います。支援者である自分との関わりの中で関係性が深まり、支援を受ける方が次のステップに進むことは喜ばしいことである一方で、支援者である自分との関わりは一時的・限定的であるがゆえに、支援が終了したあとに支援を受けていた方が苦しい状況になってしまった、そしてそれに気づくことが出来なかったという経験談をゲストからお話いただく場面がありました。

その経験談を通じて、支援者と被支援者との1対1の関係性を深めていくだけではなく、「仲間」や「地域」という視点を持ち、関係性を増やす・広げる視点を持つことの重要性についても語られました。また、このお話を伺う中で「自分の関わりや支援は本当に目の前の人のためになっているのか」という問いを常に持ち続けることの重要性も感じました。「自分の存在が役立った」と感じるのがやりがいに繋がる一方で、自己満足に陥ることで視野が狭くなっていく危険性も孕んでいます。支援者として、自らが置かれている状況や立場を俯瞰的に捉え、自省的な眼差しを持ち続けることが、より良い支援を行う上で重要であると感じました。

みなさんのお話を聞いて

今回は、将来対人援助職になることを検討している学生、NPO関係者や対人援助職として働く方々、そして転職を検討している方など、幅広くご参加いただきました。

終了後には、「転職先でも支援の仕事をしたと思っていて、でも働き続けられるだろうかと少し不安もあったんですが、皆さんのお話を聞いてやっぱり支援の仕事が長い目でしたいなと素直に思えました。」という感想もいただきました。参加いただいた方にとっても何か得られるものがある時間になっていれればいいです。

ご協力いただいたゲストのみなさん、参加いただいたみなさま、ありがとうございました!



NPOの悩み方編 みんなのNPO 研究室レポート #05

学生時代のサークル活動が私たちにもたらしたもの

2023/1/30(mon) 19:00 - 20:30 / online / free



guest

志摩機械株式会社
山下 恭平さん

静岡県立大学国際関係学部
(2013年卒業)



guest

牧之原市役所長寿介護課
宮崎 真菜さん

静岡県立大学国際関係学部
(2015年卒業)



guest

社会福祉法人
本林 智都さん

静岡県立大学国際関係学部
(2020年卒業) ※当日欠席



facilitator

認定NPO法人カタリバ
山本 晃史さん

静岡県立大学国際関係学部
(2015年卒業)

TALK SESSION

最終回となる今回は、『学生時代のサークル活動が私たちにもたらしたもの』をテーマに、2人のゲスト（予定していたゲストのうち一人がお仕事の都合により当日欠席となりました。）と、ファシリテーターをお招きし、進路選択や将来への不安が軽減されたり、サークル活動の意味を考えることで明日の活動が楽しみになることを目的としたトークセッションを行いました。

大学時代から今まで

大学時代に見つけた自分のキーワード。ー山本晃史さん

学生時代は、中高生が学校を超えて何かをチャレンジしていくことをサポートすることに面白さを感じる中で、海外の「ユースワーク」を学びたいと考え留学。その後、いろんな人の価値観に触れ、「対話」というキーワードも見つかりました。そんな山本さんが最初の進路選択ではどんなことを想っていたのでしょうか?

山本さん: 誰かに声をかけてもらって、仕事が見つかるのが嬉しいな~と思っていたら、ちょうど東京でこんな仕事があるから一緒にやらないかと声をかけてもらって、対話を大事にしてまちづくりを行う社団法人に入りました。その

他にも複数の仕事をもってやろうと思い、週末地域に出かけたり、シェアハウスをやってみたり、区の非常勤の職員をやりながら、聞き合いのまちを作っていこう!ということをしていました。

3-4年つづけてみて、いろんな世代のことを考えていくことが大事だと思ったのですが、やはりもう一度、中高生のもとに帰っていきたく思うようになり、現職「認定NPO法人カタリバ」に転職します。今では、ユースセンターの職員として働きながら、学校の校則やルールを題材にした生徒主体のルールメイキングを行う事業を立ち上げ、責任者も務めています。

好奇心で動いた大学時代と旅をする中で気づいた価値観。「何とかなる」って思えるように。ー山下恭平さん

学生時代は、何か面白いことをやりたい!という想いで友達と一緒にテーマを決めて語り合うサークルを立ち上げたと同時に、好奇心でいろんなサークルへの所属と立ち上げを行いました。有機的に行って来たサークル活動をすること、たくさんの本を読めた(読まなきゃいけない環境にいた)ことが現在に繋がっていると感じ本を読むことも大学生にお勧めしていました。また、社会貢献サークル以外に、大学

入学以前より取り組んでいた音楽活動にも力を入れていました。卒業後はバンド活動に力を入れるべく上京します。関東4県の大会で準グランプリをとり、有名なプロデューサーとの出会いもありましたが売れず、夢と挫折の東京生活のなかで27歳で自己破産をし、国内ヒッチハイクの旅、そしてユーラシア大陸をギター1本で渡る旅へと出かけます。

山下さん：投げ銭をもらって生活する旅をして、**どんな形で働いている人でも、誰かの生み出されたモノで生かされている**（「1人で生きているのではなく、人に生かされている」）んだと気づき、ないものねだりをしていてもしょうがないと吹っ切れ、腹をくくり地元に戻ることにしました。

帰ってきてからは、得意なことや役に立てればいいとほんやり思いながら、7つくらいアルバイトをかけ持ちしていましたが、たまたま知人から声をかけられ、NTT西日本で働き始めます。面白い子だと可愛がられていましたが、コロナ禍をきっかけに**自分のやりたいこと、自分が働いてもらうお金のことを考える**ようになり転職を決意します。

山下さん：植物や昆虫のことが好きで勉強をしていたので、子供たちや自然と関わることを自分のナリワイに出来ないかと思うようになりました。また、**学生時代の「キャリア概論」の伊藤洋志さんの授業で、いくつか自分の得意なことを掛け合わせて役に立てれば**いいなとも思っていました。

現職では、里山のサイクリングガイドや、昆虫採取のイベント企画、コミュニティカフェの運営、ラジオパーソナリティ、子供たち向けのネイチャーガイドなど多くのことに携わって

大学入学当初からは一転。サークル活動を経て得た価値観。—宮崎真菜さん

卒業後は海外に行くぞ！都会で働くぞ！と思って入学し、そのためには行動力をつけなきゃと思い、いくつかの社会貢献サークルに所属しました。しかし、サークル漬けて授業にあまり行かず、留年と休学をします。同時期に東日本大震災があったことが転機となり、地元にも目を向けるようになりました。この時期に勢いノリで愛媛県愛南町と秋田県横手市のNPOでインターンを経験し、田舎の人たちが楽しそうに暮らしている姿を見て、もう少し自分の地元を知ろうという思いをもって復学します。

宮崎さん：社会貢献サークルに所属して良かったと思うのが、**素敵な出会いがたくさん**ありました。一つは、**ファシリテーション**に出会えたこと。こうやってみんなで話したり、作ったりしていくんだと学びました。二つ目が、**エンパワメント**と出会えたこと。その人が持つ力を発揮できるような応援をしていく、その人の力を信じ切ることに感動しました。もう一つが、**仲間や師匠**に出会えたことです。一方で、いまでもダメだったと思うのが、遅刻常習犯だったこと、やるやる詐欺だったこと、無責任だったなということです。

就職時も地元といえば市役所でしょ！と勢いで就職した宮崎さんが、仕事の楽しさややりがいにつながる学生時代の経験も語ってくださいました。

いるそうです。自分を振り返るきっかけとなったコロナ禍では、どんな変化があったのでしょうか？

山下さん：営業の仕事では歩合が給料の相当の割合を占めたので、給料に差がありました。こういう資本主義的な数を追いつける世界観でいいのだろうか、コロナになった途端に会社が補填するのだろうか…とコロナ前では考えなかったことを考えるようになりました。そういう**社会制度そのものや自分が働くことでいただくお金のことを考えるようになり、外的要因で今までの当たり前が変わってしまったときに、（放浪していたときのよう）自分が動いて何かが変わる、「何とかなるって思えるように」したかった（自分の手ごたえを試していきたいと思った）**んです。それで独立しようと思っていたところ、活動資金を工面してもらって予定だった会社から、うちに来ないかと誘われました。

そして、本当は自分には複数のナリワイを持つことはできないと思っていたという山下さん。田舎に帰り、自分にできないことを安請け合いすることはなく、出来ることや好きなことをやるようにしていたら、お仕事の声がかかるようになり、今のようなくつものナリワイを持つスタイルになりました。また、本当に夢中になれたことを思い出す機会があったのも大きかったとおっしゃっていたのが印象的でした。

宮崎さん：学生時代からやっていたよな、きつくながつているんだろうなと思うことが、大きく分けて4つあります。一つが、**誰でもフラットな関係性であること**。まずは、相手を知って関係性を築くことから始めないと、いい方向に行かないと思っています。行政が「～させる」「～してもらう」と考えたらダメで、市民の人や企業の人たちは一緒に地域を作っていく人だと考えていかないとダメだなと思っています。二つ目が**正解のないことをあ～だこ～だ話し合うこと**。三つ目が**ファシリテーションで、話し合いの場づくりについて学んだからこそ、話し合いから何かを生むということができています**。四つ目が大きな**あいさつ**（笑）第一印象は大事で、挨拶からコミュニケーションが始まるということを先輩から教わりました。

また、宮崎さんは仕事以外に牧之原市消防団女性消防隊の隊長としても活躍されており、大学時代の反省を生かした組織運営を行い、「これならbook」というハンドブックをみんなで作成したそうです。女性ならではの目線で、防災という言葉はあえて使わず、女性特有の被災リスクを軽減するための本で、**みんなのやりたいを一番に考えて、団員みんなで作り上げました**。

サークル活動は、自分にとってどうして大切？今の自分に影響していることは？

このトークテーマでは、参加している方々にも現在のサークル活動の振り返りをしてもらい、zoomのチャットで参加してもらいました。『頼る頼られる関係。人とのつながり。自分にとって何が大切か気づかせてくれる。尊敬できる人に出会える。物事を多面的にみられるようになった。』…などなどたくさんご意見をいただきました。

宮崎さん：きっかけは気軽だったけど、やっていくうちに、**はまっていったという感じがする**。それから、今日みたいな急なトラブルへの対応が出来る力は身についたよね。

山下さん：事前のアンケートであった、「社会人になって、他の同期の社員と比べて、サークルでの経験による自分の成長を感じたことはあったか？」については、同じ方向を見て、みんなで同じことをやる経験したことで、社会に出ると違う意見を持っていて、見ている方向が違う人がたくさんいるけれど、**どんなところに行っても、人のことを尊敬してやっていけるな**と思いました。それから、人間にとって「言葉が大切」ということに気づかせてくれたと思います。誰かと、ちょっと待てよと立ち止まって考える時間がサークル活動であり、それがかけがえのない時間でした。それで、今また立ち止まって、サークル活動時に読んでいた本を読みなおして、考えていたことを思い返してみたりします。でも、サークル活動は大変だったよね（笑）

宮崎さん：大変だったことを、今の糧にしている気がします。

サークル活動で経験したことや読んだ本を、今でも思い出してみたり、考え直してみたりしているというお二人。改めて、学生時代のサークル活動がお二人にもたらしたものは？

みなさんのお話を聞いて

サークル活動そのものもちろんですが、**活動の中でできた仲間や尊敬できる方との出会いも、今に大きな影響を与えている**ということがとても印象的でした。大学生時代の数年間の活動ですが、真剣に考え行動し、仲間と語り合った日々は、社会人になっても思い出としてだけではなく、身体にしみついた癖となり、日々成長を続ける糧になっているんだと気付かされた会でした。現在、サークル活動に励んでいる大学生にとっても、先輩方の声を聞くことで、今の活動を振り返ったり、今後のことを考える良い機会となっていたら嬉しいです。

